

## 勿凝学問 91

いっそのこと日本一単位をとるのが難しい社会保障論でも目指してみようか

2007年7月7日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

テストの季節である。本年度からセメスター制などが導入された。そこで、これまで通年だったために年に1度だけ作ればよかったテストを、春と秋の2回も作らなければならなくなった——などと、よしなしことをそこはかたなく考えていると、次の『日経新聞』の社説に出くわす。

これはどう考えても、評価は完全にDだろう（赤字箇所は、社会保障の先生の立場からのコメント）。

### 07参院選・年金を問う——制度改革の責任ある道筋を示せ(社説)

2007/07/07, 日本経済新聞 朝刊 2面

年金加入記録問題で与野党が応酬を続けるなかで制度そのものをどのように再構築するかという具体的な論議が聞こえてこない(聞こえてこなくて良いんじゃないかな)。記録漏れ、あるいは宙に浮いた五千万件への早急な対応はもちろん重要だが、国民が求めているのはそれとともに制度の持続的安定であるはずだ。記録問題でさらに増幅した不信を少しでも解消するためにも、具体的な制度の青写真を示さなければならない。

#### 見えぬ与野党の改革案

やはり「年金選挙」と呼ばれた三年前の参院選挙。その直前の通常国会で自民、公明の与党は単独で年金改革法を成立させた。厚生年金の保険料負担を引き上げ続けるのは困難との判断から最終的に一八・三%(現在は一四・六四二%)にとどめ(二〇一七年に到達)、年金額は今よりは下がるものの、平均的サラリーマンの従前所得の五〇%は維持するとした。

与党はこれを「百年安心プラン」と銘打ったが(制度を知っている人は、まともな政治家を含めて、百年安心なのかどうかは今後の社会経済運営次第だと分かっていたヨ)、国民はそこに疑念を抱き、年金不信はさらに加速する結果となった(メディアが百年安心プランという言葉尻を捉えて、2004年改革で生まれた新しい日本の年金制度を批判し続けているだけだろう。百年安心プランと銘打ったが……ってのは、記事的には書きやすいですからねえ)。保険料を一定水準で固定すれば、少子高齢化が進む中で年金額は下がらざるを得ない。この方式を採用したスウェーデンでは「保険料を一八・五%で固定し、給付は経済成長による自動調整」とした。つまり経済や雇用の動向によっては年金額は下がることも国民に示したのである。

与党案のように保険料を固定し、給付も五〇%以上を約束することには無理がある。国民はばらまきの甘い公約を敏感に見抜いたともいえる。こうして自民党は参院選で民主党に敗れ(当時、ちゃんとした制度論争はなされていなかったゆえ、当時の敗因は他にあると考えた方がいいだろうね)、当時の小泉純一郎首相も選挙後に「国民の七割が年金改革法に反対だった」と認めざるを得なかった。

一方、勝った民主党は大胆ともいえる改革案を公約に掲げた(大胆というか、無責任というか…あれは、とてとても年金改革案と呼べる代物ではなかったのに、すました顔して年金改革案と言っていたところは大胆不敵、厚顔無恥だったとは言える)。サラリーマン、自営業などの区別なく、全国民が所得に応じた保険料を納める「全制度の一元化」である。この所得に応じた年金の保険料は当時の厚生年金の保険料一三・五八%に据え置く。そして所得がない、あるいは低い人には最低保障年金を支給し、そのために消費税を三%程度引き上げて財源とする。保険料徴収のために国税庁と社会保険庁を統合する、というのが骨子だ。

実現できるのかという疑問がないわけではない。自営業などから所得の一三・五八%を徴収するとなると所得三十万円としても月四万円、夫婦では八万円を超える負担となる。労使折半のサラリーマンとの「格差」が生じる。そうした問題点はあるものの(他にも問題点は沢山あるんだけどね…)、現行の基礎年金の未納、専業主婦の年金の問題点解消にもつながる。選挙前に消費税引き上げも打ち出し検討に値する案といえた(日経の年金社説担当者にはそう見えていたよだということ、当時からよくわかっていました)。

三年後の参議院選を迎えようとしている今、与野党から明確な制度改革案は示されていない。与党はこの間、パート労働者への厚生年金適用拡大や、厚生年金と公務員などの共済年金の一元化という改革を進めている。しかし給付と負担のあり方の見直しという根本的な点での案は出していない(根本的な点での案ってのは何を意味するのか不明だね)。三年前に「百年安心」といった以上、それをすぐに変えることはできない、という事情もあるのだろう。

もっと驚かされるのは民主党である(今頃驚いてどうするの? 2004年の時から驚いておいてほしかった。当時と共通するのは彼らの無責任体質でしょう)。基本的には三年前と同じ、全制度の一元化、最低保障年金の創設という案ではあるが、最低保障のための財源については「三%の消費税引き上げ」を引っ込めてしまった。「今は引き上げの環境にはない」と説明しているが、これで納得しろというのは無理がある。また所得比例年金の保険料率をどの程度にするのか、年金額はいくらになるのかも見えてこない(この問題は昔からあるのに、それに気づいていなかった方がおかしいと思うんだけどね)。無責任なその場しのぎとられてもやむを得ない(ようやく気づいたかな 笑)。

人気取りは通用しない

日本の公的年金制度にとってバラ色の改革案は存在しない。過去三十年間以上にわたって、与野党とも常に選挙を意識し「負担はできるだけ低く、年金額は高く」という無責任な人気取り政策を続けてきた。その結果、今では厚生年金だけで四百五十兆円にも上る積み立て不足が生じている(公的年金制度への完全なる無理解。したがって、このあたりの文章は、前後左右、

無理解に基づく大ウソ文章が続く箇所)。付けを後へ後へと回してきたのである。これからも年金をきちんと支払っていくには、負担を重くするか給付を下げるしかない。どの世代にとっても痛みを伴う改革に手をつけなければ、国民はもらえるはずの年金を受け取ることはできない。

安倍晋三首相は五日、今秋の税制改正論議で、消費税の引き上げを検討する考えを示した。二〇〇九年度に基礎年金の国庫負担率(現在三六・五%)を二分の一に引き上げるための財源を確保する必要があるとの考えだろう。この選挙戦を通じて、どの政党も年金の財源についての踏み込んだ議論もする必要がある。

だいたいもって、日本の年金をながめるときに、「厚生年金だけで四百五十兆円にも上る積み立て不足が生じている」という事実誤認に基づいてながめているのだから、まともな年金論を書くことができるはずがない。おそらく、この社説を書いた人は、次の書評を書いた人と同じじゃないのかな——上記社説の「もっと驚かされるのは民主党である」のあたりは比較的よくできていたので、今少し自信がないのだけだ。

#### 信頼と安心の年金改革、バランスシート概念導入——高山憲之著(読書)

2004/06/06, 日本経済新聞 朝刊, 25面

昨秋の衆院選で火がついた年金改革の議論は、閣僚や国会議員、自治体首長などに相次ぎ発覚した保険料の未納問題もあって、混迷の度を深めた。年金の空洞化は払う側、徴収する側それぞれに原因がある。ことに徴収側の見通しの甘さや体制の不備は目に余る。議論の混迷が極限に達したなかで成立した年金制度改革法は、そうした「年金の誤算」をいっそう拡大させる恐れをはらんでいる。その事実を浮き彫りにした書だ。

たとえば、これから十数年にわたって続く保険料の引き上げと年金給付への税金投入の拡大。国民や企業の負担総額は毎年一兆五千億円ずつ増える。私たちの懐具合や企業収益に負の影響を及ぼすにもかかわらず、会社員の実質的な手取り収入は年〇・九%の増加が確保されることになっている。

ほかにも女性や高齢者の労働参加の過大な見積もり、保険料の引き上げに伴って税収が減る矛盾など、改革の前提の甘さを一つひとつ検証する。その結果、「さらなる大改革を早晚迫られることになる」と警鐘を鳴らす。大改革とはなにか。真っ先に浮かんでくるのは、今改革であまり議論されなかった受給開始年齢の一段の引き上げだろう。若い世代にとって年金は逃げ水そのものだ。

著者は年金財政の点検にはバランスシート(貸借対照表)の概念を持ち込むことが不可欠だという。肥大した年金制度全体の資産・負債を超長期の時間軸のなかで凝視する。見えてくるのは六百兆円に達する巨額の債務超過だ。政府・与党は債務の圧縮手段を保険料の引き上げに頼ろうとしている。

黙っていれば広がり続ける出口はあまりいじらずに、入ってくるお金をできるだけ増やそうという考え方だ。だが、入り口をさほど広げなくてもバランスシートの傷みを修復する方法はある。そ

の解を導くことが本物の改革につながるという信念が貫かれている。

改革法の前案は坂口力厚生労働相が示した改革試案だった。試案のたたき台を二年にわたって議論してきた社会保障審議会の年金部会に、著者のような考えを持つ委員が入っていれば、改革法の仕上がりはかなり違ったものになっていたに違いない。

(編集委員 大林尚)

公的年金のバランスシート論については、その後の年金研究者たちの間での論争で、完全に決着がついていたんじゃないなかつたっけ、年金バランスシートは間違いだって〔[「勿凝学問 15x やれやれのバランスシート論」](#)などを参照〕。今日の「07参院選・年金を問う—制度改革の責任ある道筋を示せ(社説)」を書いた人は、この3年間、年金を何も勉強できないほどに猛烈にお忙しかつたご様子で、心より同情いたします。人間、忙しすぎるのは、どうもいけない。記者さんたちのワークライフバランスを、まず、実現してあげないと、記事の質が、今後とも落ち続けていくんだらうねえというのが、今朝の社説を読んで、まず思ったこと。

とまあ、ここで本題に入るとしましょう。

わたくしの講義の履修者から、こんなトンマな社説を書く者が出てこないようにという、ささやかな願いをこめて、わたくしは講義をやっていたりもする。よって、春学期に彼らに課したレポートは、次のようなものであつた。

講義用ホームページ(パスワードブロック付き)より

レポート 学事センターに提出してください—読后感想文だと思ってください。

- 第1回レポート 5月09日(水)  
『[社会調査のウソ](#)』
- 第2回レポート 5月16日(水)  
『[年金これだけ心得帳—もうこれ以上はやさしく書けません](#)』(リザーブブックに在り<sup>1)</sup>)  
『[図解 どうなるあなたの社会保障?](#)』(リザーブブックに在り)
- 第3回レポート 6月06日(水)

---

<sup>1</sup>リザーブブックとは旧図書館に貸出禁止の本として数冊配架されている本のことである。

[講義要綱](#)には次のように書いている。

「社会保障関連の文献を読んでもらつては、レポートを書いてもらう、そういう形の講義にしたいと考えている。文献は、できるだけ、旧図書館リザーブブックコーナーに配置しておく。暇があれば、趣のある旧図書館にこもり読書をする。そういうライフスタイルに耐えられる人の受講をもとめる」。

「年金改革論議の政治経済学」『[年金改革と積極的社会保障政策](#)』（リザーブブックに在り）

- 第4回レポート 6月20日（水）  
「2004年、年金改革の意味と意義と年金論議の攪乱要因」『[医療年金問題の考え方](#)』（リザーブブックに在り）  
「公的年金における世代間格差をどう考えるか」『[医療年金問題の考え方](#)』（リザーブブックに在り）
- 第5回レポート 7月04日（水） 6月に出る本における年金該当箇所（ホームページから全部読むことができます）——『[医療政策は選挙で変える](#)』

授業中にも話したように、本当は毎週、本を読んで考えてレポートを書いてもらいたい。しかしそれでは、学事センターに迷惑をかけるから、2週間に1回と、遠慮をしている（笑）。

でっ、講義の中で、課題図書のことを説明しているのかというと、そうではない。文章なんてものは読めば分かるように書かれているのだし、読んでも分からない本があるとすれば、そっちの方が大問題だろうと考えていたりもする……。そこで講義の基本として、『[再分配政策の政治経済学I](#)』の冒頭にある「再分配策経世における利益集団と未組織有権者の役割」を説明するといいつつ、毎回話しは脱線し、ついついマイブームの話しをしてしまう。本年度最初の2、3回は、道徳科学者としてのアダムスミス思想とベンサム功利主義思想の相違点と経済学における価値判断の役割を、スミス『道徳感情論』、ベンサム『立法と道徳の原理序説』を比較したり、アローの不可能性定理や社会的厚生関数を用いながら説明してしまっていた。そして突如、コムスンの時は介護、小松先生の『[医療の限界](#)』が出たときには、医療の話しをしてしまったし<sup>2</sup>、年金の話に入ると学生さんに

---

<sup>2</sup> 6月20日水曜日、大学のメールボックスに、小松先生から送られてきた『医療の限界』が届く。研究室で『医療の限界』を読んでいると、小松先生から、わたくしが贈った『医療政策は選挙で変える——再分配政策の政治経済学IV』へのお礼のメールが届く。そして、小松先生にお礼のメールを書いているときに、次のメールが、見知らぬ人から届く。  
(掲載許可を頂いております)

突然のメールで失礼いたします。

○県立病院の医師です。  
今年春頃からの先生の読者です。公共財としての医療ということを考えるようになり、先生の著書にたどり着きました。先生とは同世代の者です。

小松秀樹先生の、著書が新潮新書から発行され（医療の限界）権丈先生の文章も引用されていました。  
迫りに満ちた本と感銘を受けました。お読みになることがありましたら、勿凝学

フェイントをかけ、年金論を築くには生活保護への理解がカギとなると言って生活保護のことを夢中になって話すこともあった。そして、講義のあった夕方に、記者さんから医師不足や、年金記録問題についてのインタビューがある場合などは、こっそりとインタビューで話すことの練習をしていたりもすることもあったりしないでもない・・・。

でも、春学期のテストは、年金。これははじめから決めていた方針で、レポートの計画は、テストの際に年金の問題について考えることができるように、立てていた。そして春

---

問での言及をお待ちしております。  
先生の最新刊は書店に発注していますが未だ入手できていません。

知人には伝えていますが、先生の著書やホームページがより読まれることを祈念しております。

突然のメールは最近多く、次の印象深いメールを紹介させてもらいたい。  
(掲載許可を頂いております)

----- Original Message -----

Date: Thu, 28 Jun 2007 13:05:00 +0900

Subject: 看護師 76 万のうちのひとりです。

----

『医療政策は選挙で変える』拝読させていただきました。看護師 76 万のうちのひとりです。診療所で看護師をしています。

私には難しいところもあり、充分理解できたかどうか自信はありません。

それでも、先生のような研究者がいらっしゃることに、ずいぶん元気をもらいました。

「医療従事者はどうせ一枚岩ではなかろうと高をくくっている」ほんとうにそうだと思います。私も看護協会の会員ですが、どこかでどんなに頑張っても一枚岩にはなれないのではないかと感じてしまうところがあります。

毎日あきらめたらおしまい。看護師は、誰よりも患者さんのそばにいて一番現場を知っている。その看護師が黙ってしまえば、もっと医療は悪くなると思い直して、踏みとどまっています。

『困難に立ち向かう看護』という本に、際限なく続くコスト削減に対処できなくなる看護師の姿が描かれていました。日々の医療の現場と、先生の著書の『医療政策は選挙で変える』をあわせて読み、なぜ看護師は一枚岩になろうとしないのか、患者さんの代弁者になろうとしないのか、その理由を考えてみました。

忙しさもあるかと思いますが、なにより自分たちの仕事の意味を考えることが少ないと思いました。

自律した学びをしていないんだと思いました。

看護教育では、社会保障についてしっかり学ぶ機会はなかったように思います。

本当の意味で患者さんの求めに答えられる看護師を目指して頑張ろうと思いました。そして、周りの人に本の紹介をしました。

ありがとうございました。

要領を得ないメールで失礼いたします。76 万分のうちの何人かの手に渡ったことをお知らせしたいと思いました。

わたくしも元気を頂きました。ありがとうございました。

のテストの問題は、考えに考えたあげく（ちょっとウソ）、次のようにした。

講義用ホームページ(パスワードブロック付き)より  
問題は、こうしよう。

**「1999年財政再計算から今日までの年金をとりまく政治経済現象を歴史的、俯瞰的観点から整理するとともに、公的年金というものの役割を整理し、今日、年金がこの国における重要な争点と化している原因を考察せよ」。**

いまから10日間、考えては読み、読んででは考えて書いてみる。そういう生活をしてみようか。なお、Ⅲ巻所収の年金問題「勿凝学問」も目を通し、公的年金バランスシート論の間違いや、社会保険料と租税の違いなどをしっかりと理解しておいてください。

持込不可、80分。

途中退出なし。

答えは、じっくりと読んで楽しませてもらいますので、しっかりと推敲された答案を期待します。

もぐりの方々も、答案をメールで送ってきてくれれば、採点しますよっ。

う～んっ、ぐわんばってね（笑）。

これは写経のテストか！？と勘違いさせるほどに、「持ち込み可」で持ち込んだ教科書を写せば単位が取れるといわれる有り難き（わたくしも昔随分とお世話になった）楽勝科目と呼ばれる授業があまたある世の中、なんのご縁ゆえか、この講義を履修してしまった人がいたりする。このご縁を大切に、さらには青春の思い出のひとつにでも刻み込んでもらおうと願って、いつそのこと日本一単位をとるのが難しい社会保障論でも目指してみようかと思ったりもするわけである。ありがた迷惑かな？

レポートを提出し続け、テストを受けて、単位を取ることができれば、君たちは、絶対に、ここで紹介した社説の執筆者よりは賢くなることできるヨ。それくらいは保証するから、大いにファイトです。

僕の講義を履修して、出される課題をこなしていったら友だちが減ってしまうのも、ちょいとかわいそうだから、せめて履修者のなかでの友情を培っておこうか。テストまで、友人知人、見知らぬ人たちと図書館のグループ学習室にこもったり、旧図書館の趣のある場所でリザーブブックについて語り合ったりして、ああでもないこうでもない、楽しく遊んでおいておくれ。でっ、秋学期のテストは医療だ。よって、レポートは医療もの――



だけど、何を話すかはひみつのままでということで、今日は失敬。

付録

同じ『日経新聞』でも、最近の大機小機は、ヒットが連続している。その一つを紹介<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> 最近、他には、次の記事などがおもしろい。

- 「[住みよい国・日本](#)」(6月30日)
- 「[参院改革論議はどこへ行ったのか](#)」(7月3日)



二〇〇六年六月二十二日の

経済財政諮問会議で、小泉総理(当時)はきわめて興味深い発言をしている。

「消費税は私の在任中上げないと言ったら無責任だと言われた」「公共事業をマイナ

スにしても税収が上がって(中略)私が言っているとおりになっている」「歳出をど

## 小機大機

をどんどん切り詰めていけば、やめてほ

しいという声が出てくる」「歳出削減を徹底していくと、も

う増税の方がいいという議論になってくる。ヨーロッパを

見ると消費税は一〇%以上、ドイツは一九%(中略)、野党が提案するようになってい

る」

歳出削減を徹底すると、もう増税の方がいいという議論になる。欧州の高い消費税率はその結果だというのだ。

わが国の現状はどうだろうか。もう増税の方がいいところまで歳出削減が進んでいるのだろうか。いまだ政

## 国民の悲鳴と参議院選挙

治家の金の使い方への不信感、談合や効果のない事業への補助金等、税金無駄遣いの例は枚挙にいとまがない。

一方で、国民の間からは、うめき声、悲鳴も出始めている。医療費の自己負担引き上げ、生活保護老齢加算や母子加算の削減への反発、小児科

医・産婦人科医の不足と過酷な勤務状況の実態等、マスコミが報道する国民の声は、歳

出削減が決して楽なものではないことを物語っている。

冒頭の会議では、歳出・歳入一体改革(骨太〇六)が決定された。二〇一一年度に国・地方の基礎的財政収支を黒

## 国民の悲鳴と参議院選挙

字化するため、歳出削減額が十一兆円から十四兆円、うち社会保障費の削減が一・六兆円とされた。初年度の歳出削減が実行に移されたことたん、

国民各層から悲鳴が聞こえ始めたのである。今後、骨太〇六の社会保障費削減を達成するには、年金支給開始年齢の

引き上げ、医療費自己負担の更なる引き上げ等、もっと過酷な削減が必要となる。

政治家の金の使い方が変わるのを待っていたのでは、悲鳴が命の問題になりかねない。わが国経済は順調に拡大しつつある。成長を通じての格差解消、財政再建は間違っ

てはいないが、同時に所得再分配政策が必要である。安定的な財源を確保し安心できる社会保障を確保することこそ

## 国民の悲鳴と参議院選挙

が政治家の仕事だ。「歳出削減の具体的メニュー」と「負担増(財源)」の選択枝を国民の前に提示し、国民に問わ

ない参議院選挙に、いったいなんの意味があるのだろうか。(ミスト)

ご参考までに。

勿凝学問 46 [歳出削減はいつまでつづくのか——この国には新自由主義とか市場原理主義の政治家などいない](#)